

【漁況】

[マアジ]

1. 漁獲量の動向（農林統計）

全国のマアジの漁獲量は、昭和40年の53万トンにピークに減少傾向となり、昭和55年には5万4千トンとなりました。

その後増加傾向に転じ、平成8年には33万トンに増加し、平成10年までは30万トン台で推移しましたが、再び減少傾向に転じ、平成21年は16万6千トンとなりました。

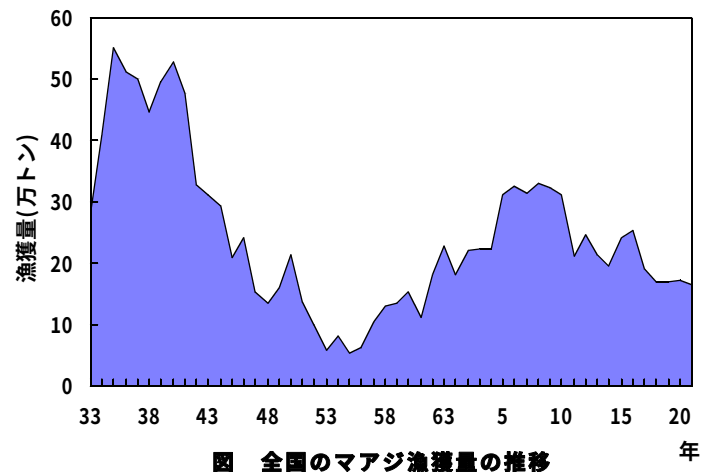


図 全国のマアジ漁獲量の推移

2. 平成22年7～9月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域では、縄瀬沖、甕島西、甕島東、串木野沖に漁場が形成されました。

薩南海域では、開聞沖、島間沖に漁場が形成されました。

4港計のまき網では、マアジ仔（0歳魚：平成22年生まれ）の来遊が非常に少なかったことから、マアジ豆・小（1歳魚：平成21年生まれ）主体の漁獲で561トンの水揚げがあり、前年の26%及び平年の53%と低調に推移しました。

3. 平成22年10～12月期の見とおし

漁獲の主体は、マアジ豆（0歳魚：平成22年生まれ）、マアジ小（1歳魚：平成21年生まれ）でマアジ中（2歳魚以上）も混じるでしょう。

来遊量は、前年、平年を下回るでしょう。

（根拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

漁獲主体となるマアジ0歳魚は、定置網、まき網共に低調に推移していることから、前年、平年を下回ると考えられ、マアジ1歳魚も、前期から低調に推移していることから、低調であった前年並みで、平年を下回ると考えられます。

総合的に判断すると、前年、平年を下回ると考えられます。

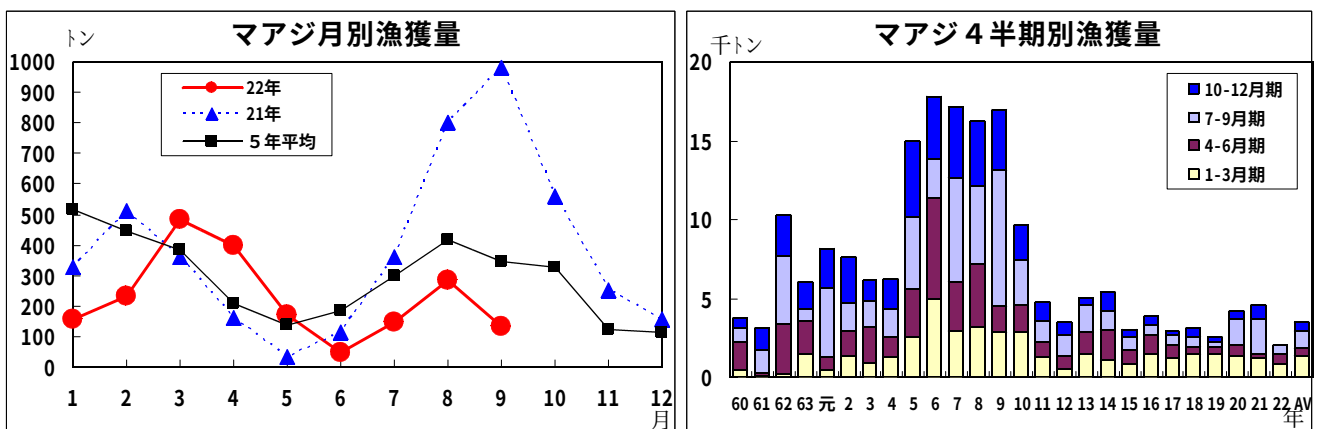


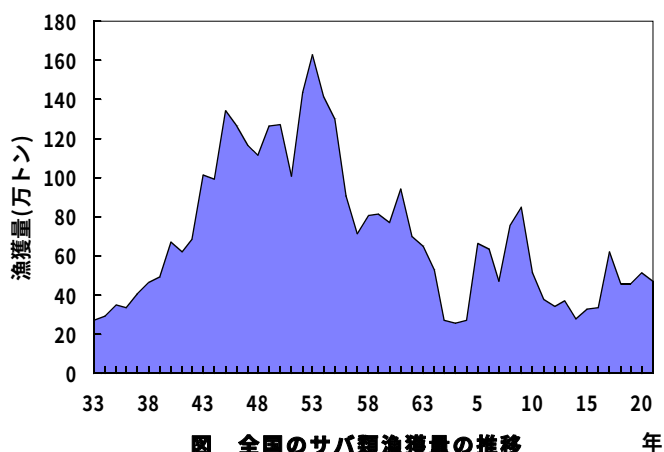
図 マアジまき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年（平成17～21年）の平均値(AV)、平成22年9月29日までの水揚げ量を使用。

[サバ類]

1. 漁獲量の動向（農林統計）

サバ類の漁獲量は、昭和53年の160万トン进行ピークにマサバ資源水準の低下により年々減少し、昭和57年には72万トンとなりました。その後は、ゴマサバの増加により大幅な漁獲量の減少は見られませんでした。昭和63年以降はゴマサバの資源水準も低下したため、サバ類の漁獲量は大きく減少し、平成3年には26万トンとなりました。平成5年から増加に転じ平成9年には84万9千トンまで増加しましたが、その後減少し平成14年は27万9千トンとなりました。平成17年から再び増加し平成21年は47万1千トンとなりました。



2. 平成22年7～9月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域では、縄瀬沖、甌島東、串木野沖に漁場が形成されました。

薩南海域では、湯瀬、宇治、島間沖に漁場が形成されました。

4港計のまき網では、ゴマサバ豆（0・1歳魚：平成22・21年生まれ）主体に4,669トンの水揚げで、前年の228%及び平年の92%となりました。7・8月は平年を下回り低調に推移しましたが、9月に入りゴマサバ豆（0・1歳魚）主体に好調となりました。

3. 平成22年10～12月期の見とおし

漁獲の主体は、ゴマサバ小（1歳魚：平成21年生まれ）及びゴマサバ豆（0歳魚：平成22年生まれ）となるでしょう。

来遊量は前年、平年を上回るでしょう。

（根 拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

ゴマサバ0歳魚は、本県海域への来遊が良好で今期も好調な漁獲になると考えられます。ゴマサバ1歳魚は、9月から来遊し、今期は漁獲の主体となり前年を大きく上回ると考えられます。ゴマサバ2歳魚は、太平洋系群の加入状況が悪く来遊が見込まれません。ゴマサバ3歳魚以上は、漁獲の主体にはなりませんが今後も散発的な漁獲が見込まれます。

総合的に判断して、前年、平年を上回ると考えられます。

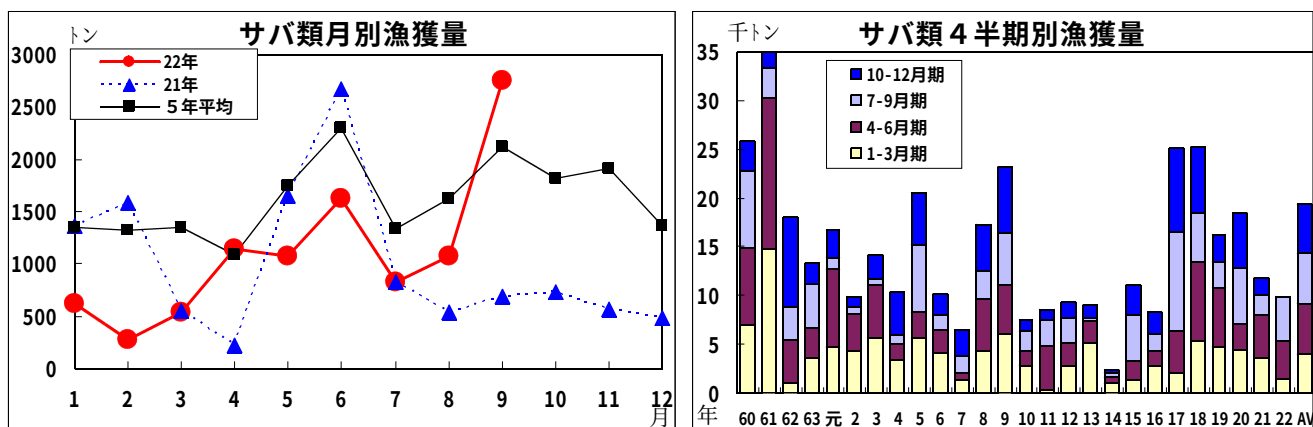


図 サバ類まき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年（平成17～21年）の平均値(AV)、平成22年9月29日までの水揚げ量を使用。

[マルアジ（アオアジ）]

1. 漁獲量の動向

マルアジの漁獲量は、昭和62年から平成元年に1,500トンを超えるピークがあり、その後低調に推移し、平成12年から15年に再度ピークを迎え15年には3,150トンと最高を記録しました。平成16年以降は低調に推移し、21年は過去最低の94トンとなりました。

2. 平成22年7～9月期の漁況の経過

串木野沖、野間池沖が漁場となり、期全体で41.4トンの水揚げで、前年の579%及び平年の76%でした。

3. 平成22年10～12月期の見とおし

漁獲の主体は、マルアジ小（1・2歳魚：平成21・20年生まれ）でしょう。

来遊量は前年を上回り、平年並みになるでしょう。

（根 拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

マルアジ小(1・2歳魚)の来遊は、現在まで非常に低水準で経過した前年を上回っていることから、前年を上回って平年並みになると考えられます。

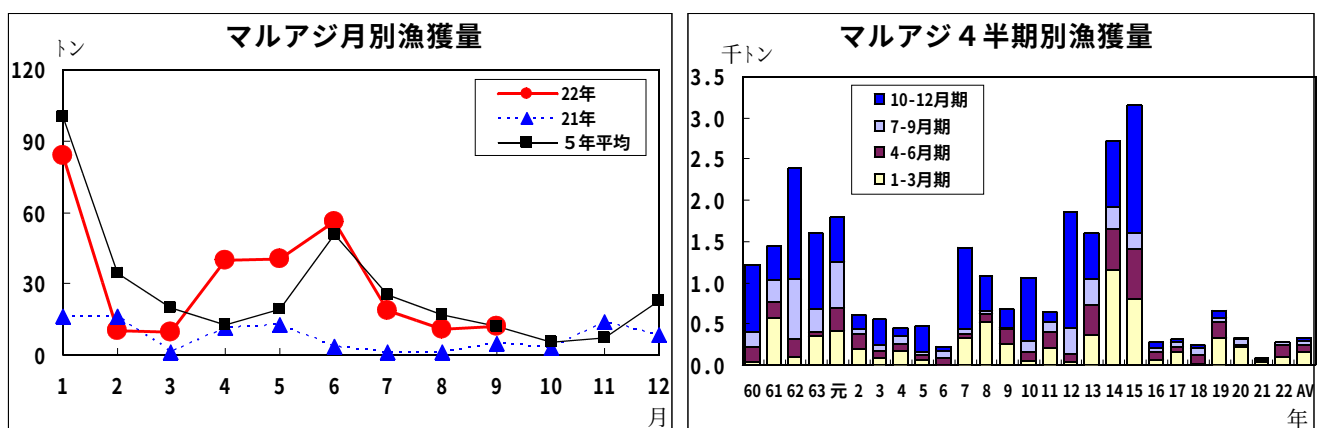


図 マルアジ（アオアジ）まき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年（平成17～21年）の平均値(AV)、平成22年9月29日までの水揚げ量を使用。

[マイワシ]

1. 漁獲量の動向（農林統計）

全国のマイワシの漁獲量は、昭和30年代から40年代にかけての不漁期の後、昭和48年頃から増加の傾向が見られ、昭和63年には449万トンまで増加しました。

しかし、平成元年から三陸沖を中心に漁獲量が減少し始め、その後もマイワシの若齢魚の減少等により、全国的に漁獲量は減少を続け、平成7年には66万トン、平成10年は16万7千トンとなりました。

その後さらに減少し平成14年は5万トンとなり、以降横ばい傾向で平成21年は6万1千トンとなっています。

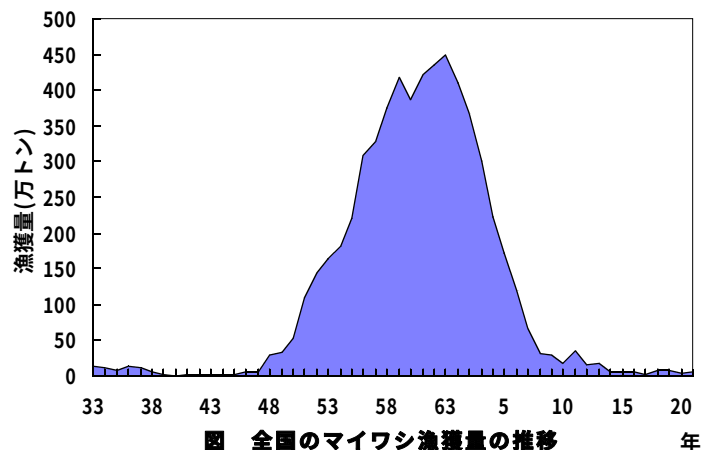


図 全国のマイワシ漁獲量の推移

2. 平成22年7～9月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域及び薩南海域のまき網では漁場が形成されませんでした。ウルメイワシに混じって若干漁獲されました。北薩海域の棒受網では、八代海、長島沖でウルメイワシに混じって小羽が漁獲されました。

4港計のまき網では小羽(0歳魚：平成22年生まれ)主体に22トンの水揚げで前年の83%、平年の13%となりました。北薩海域の棒受網は、小羽(0歳魚：平成22年生まれ)主体に68トンの水揚げで前年の1,207%、平年の433%と前年、平年を大きく上回りました。

3. 平成22年10～12月期の見とおし

漁獲の主体は小，中羽(0歳魚：平成22年生まれ)でしょう。

来遊量は前年，平年を下回るでしょう。

(根 拠)

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

前期棒受網で漁獲された0歳魚(平成22年生まれ)は、資源の減少後では最も多いことから、本県西岸の0歳魚の加入状況は比較的良好であったと考えられますが、今期の主体となる太平洋系群の南下群は、漁獲情報が少ないことから全体としての、来遊量は前年，平年を下回ると考えられます。

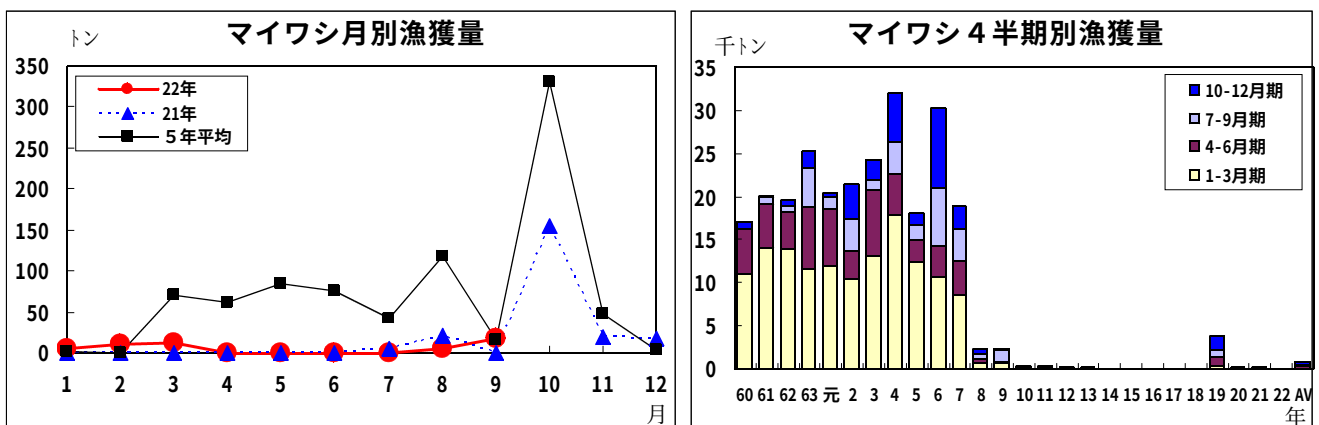


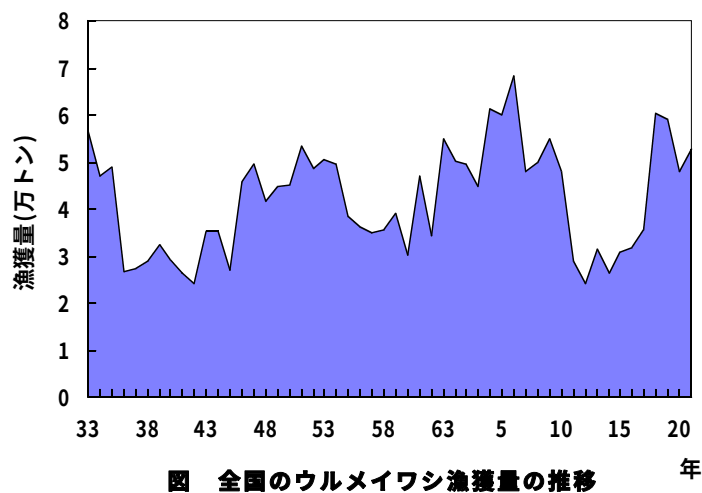
図 マイワシまき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年（平成17～21年）の平均値(AV)，平成22年9月29日までの水揚量を使用。

[ウルメイワシ]

1. 漁獲量の動向（農林統計）

全国のウルメイワシの漁獲量は、昭和30年代後半から40年代前半にかけて3万トン前後で推移していましたが、昭和46年から54年まで5万トン前後で推移しました。昭和55年以降、漁獲量は減少し昭和60年には3万トンとなりました。その後、増減を繰り返しながら増加傾向を示し、平成6年に6万8千トンとなりました。その後減少傾向に転じ、平成12年は2万4千トンとなりましたが、近年は増加傾向となり、平成21年は5万3千トンでした。



2. 平成22年7～9月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域では、甌島東に漁場が形成されました。

薩南海域では、竹島、野間池沖に漁場が形成されました。

4港計のまき網では、小，中羽(0歳魚：平成22年生まれ)主体に727トンの水揚げがあり，前年の67%，平年の95%となりました。北薩海域の棒受網では，小，中羽(0歳魚：平成22年生まれ)主体に1,034トンの水揚げがあり前年の93%，平年の157%となりました。

3. 平成22年10～12月期の見とおし

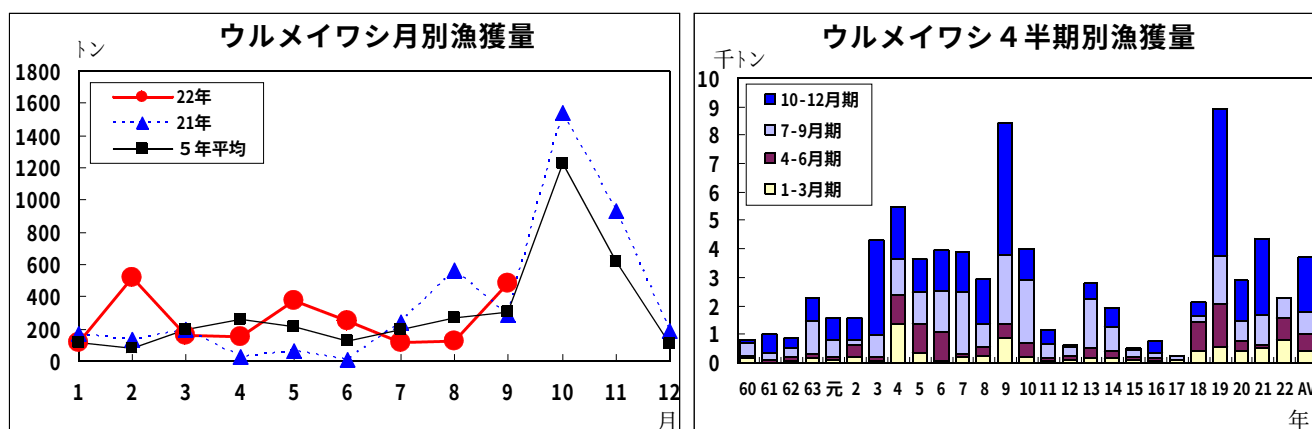
漁獲の主体は，大羽(1歳魚・平成21年生まれ)，中羽(0歳魚・平成22年生まれ)になるでしょう。

来遊量は前年，平年を下回るでしょう。

（根拠）

漁獲の主体と来遊量は，現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

今期漁獲の主体となる太平洋系群は，宮崎県を除く太平洋各県の漁獲状況が良くないことから，0歳魚の加入が低調であったと判断されるため，前年，平年を下回ると考えられます。



※平年値は過去5年（平成17～21年）の平均値(AV)，平成22年9月29日までの水揚量を使用。

[カタクチイワシ]

1. 漁獲量の動向（農林統計）

カタクチイワシの漁獲量は、昭和48年まで30万トン台で変動していましたが、昭和49年以降減少傾向となり昭和54年には13万トンとなりました。その後、徐々に漁獲量は増加し昭和59年には22万トンとなりましたが、昭和62年には再び14万トンまで減少しました。昭和63年以降は大きく増減を繰り返し、平成13年は30万トン、平成14年は44万トンでした。平成15年は過去最高の53万5千トンとなりましたが、その後減少傾向に転じ、平成21年は34万5千トンとなりました。

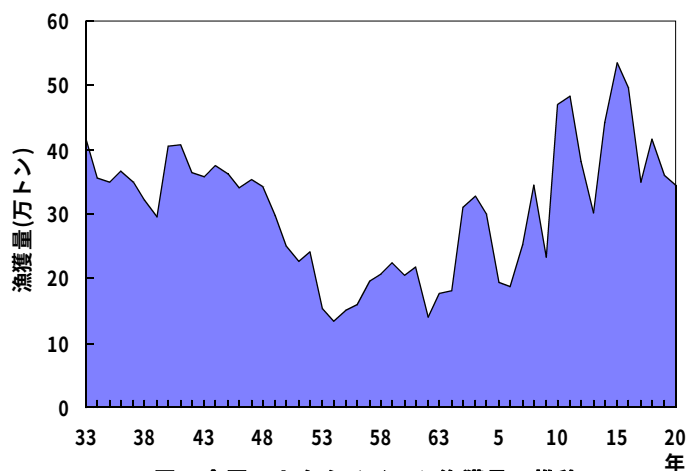


図 全国のカタクチイワシ漁獲量の推移

2. 平成22年7～9月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）のまき網及び棒受網】

鹿児島県4港のまき網では770トン（前年比301％、平年比180％）と前年・平年を上回り、北薩海域の棒受網では201トン（前年比85％、平年比89％）と、前年・平年を下回りました。

3. 平成22年10～12月期の見とおし

期間の前半は大羽銘柄(1歳魚・平成21年生まれ)が漁獲の主体で、後半は小～中羽銘柄(0歳魚・平成22年生まれ)が漁獲の主体となり、平年は上回り前年は下回るでしょう。

（根 拠）

前期の漁況が良好なことから、10～12月期もある程度の来遊は期待されます。

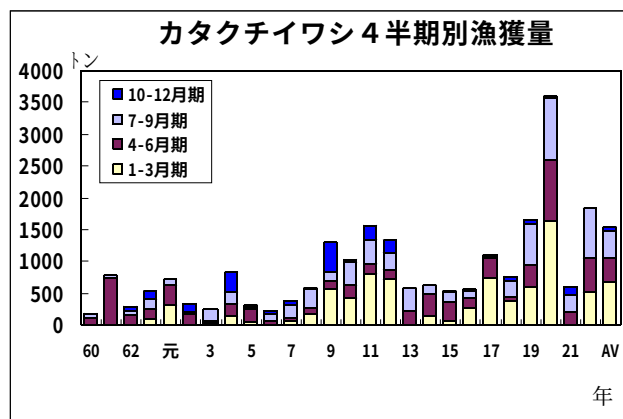
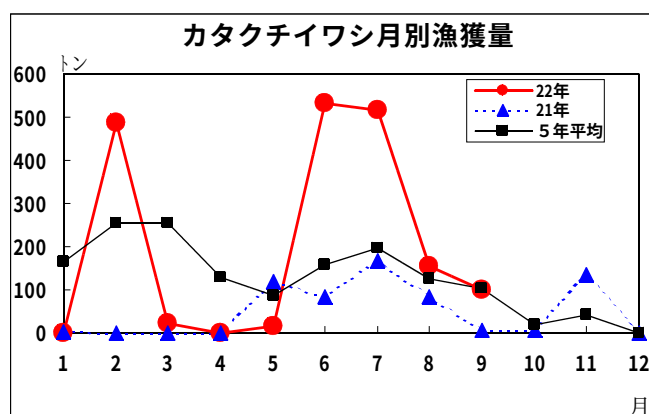


図 カタクチイワシまき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年（平成17～21年）の平均値(AV)、平成22年9月29日までの水揚量を使用。

[イワシ類参考資料]

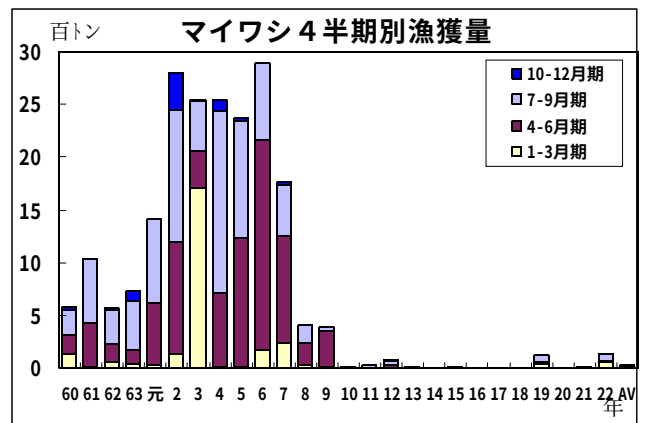
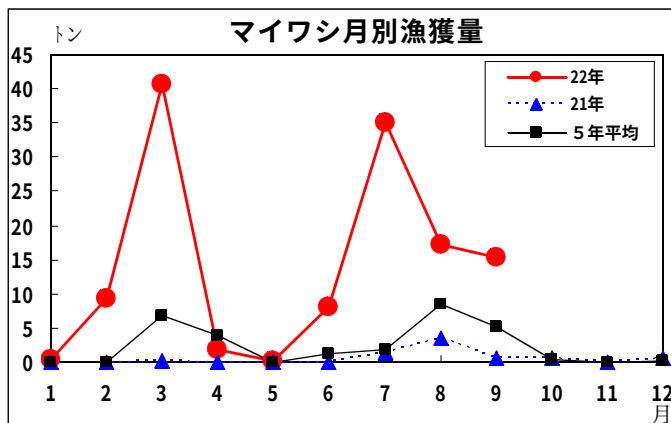


図 マイワシ敷網漁獲量変化(阿久根港)

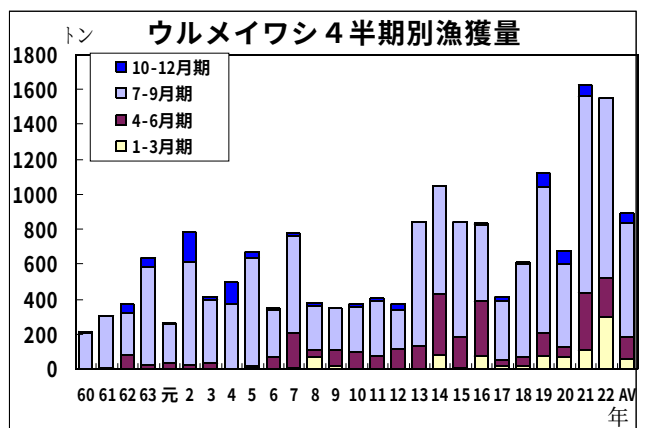
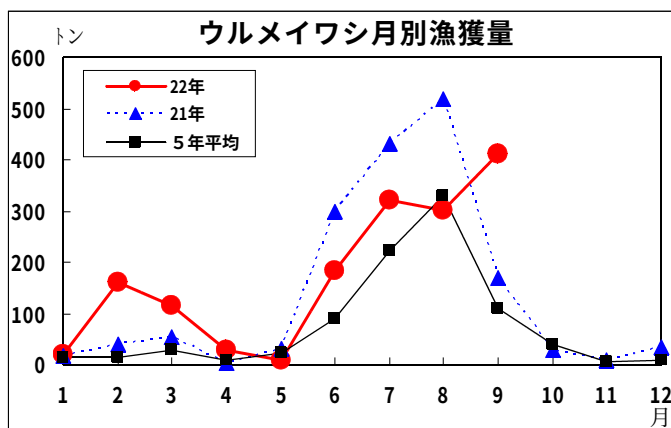


図 ウルメイワシ敷網漁獲量変化(阿久根港)

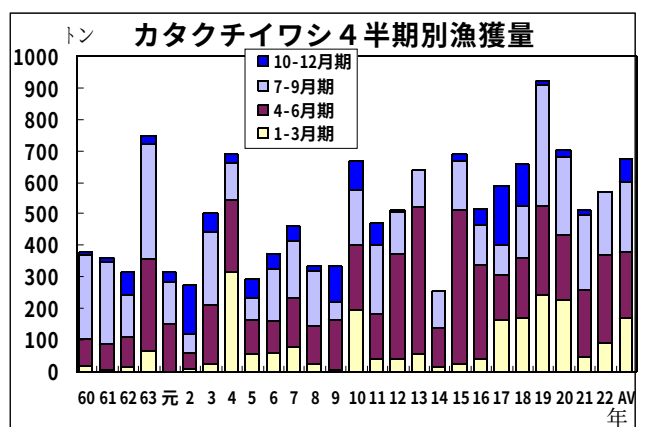
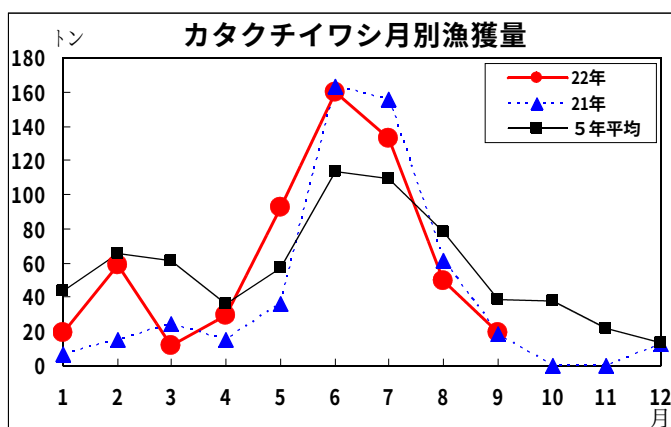


図 カタクチイワシ敷網漁獲量変化(阿久根港)

※ 平年値は過去5年（平成17～21年）の平均値(AV)，平成22年9月29日までの水揚量を使用。

[参考：漁況経過のみ記載]

〈ムロアジ類（クサヤモロ、モロ）（4港計）〉

1. 経年変化及び平成22年7～9月期の漁況の経過

ムロアジ類の漁獲量は、平成2年の21,700トン进行ピークに急減し、平成6年以降は、1,500トンから4,500トンの間での推移となっています。平成21年は2,803トンとなりここ4年間横ばいとなりました。

平成22年7～9月は、薩南海域ではまとまった漁場は形成されず、期全体で229トンの水揚げで、前年の27%及び平年の54%と低調に推移しました。

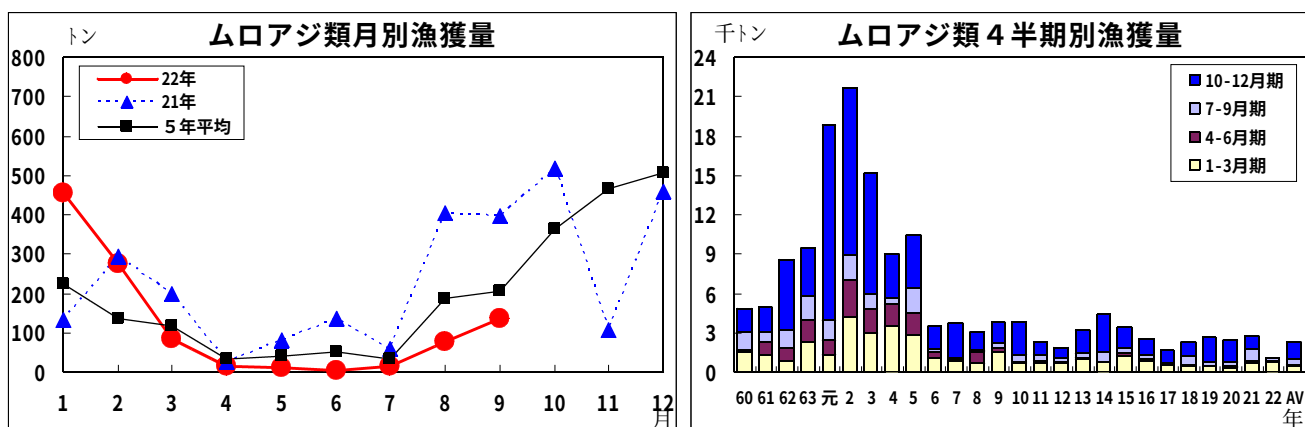


図 ムロアジ類まき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年（平成17～21年）の平均値(AV)、平成22年9月29日までの水揚量を使用。

〈オアカムロ（4港計）〉

1. 経年変化及び平成22年7～9月期の漁況の経過

オアカムロの漁獲量は、平成元年の5,300トン进行ピークに一端減少し、平成7年に4,400トンと再度ピークを迎えた後は減少傾向となっていました。平成20年は2,291トンと前年・平年を上回り、平成21年も前年は下回りましたが、平年並みの1,470トンとなりました。

平成22年7～9月は、薩南海域ではまとまった漁獲はなく、期全体で34トンの水揚げで前年の6%及び平年の10%と低調な推移となりました。

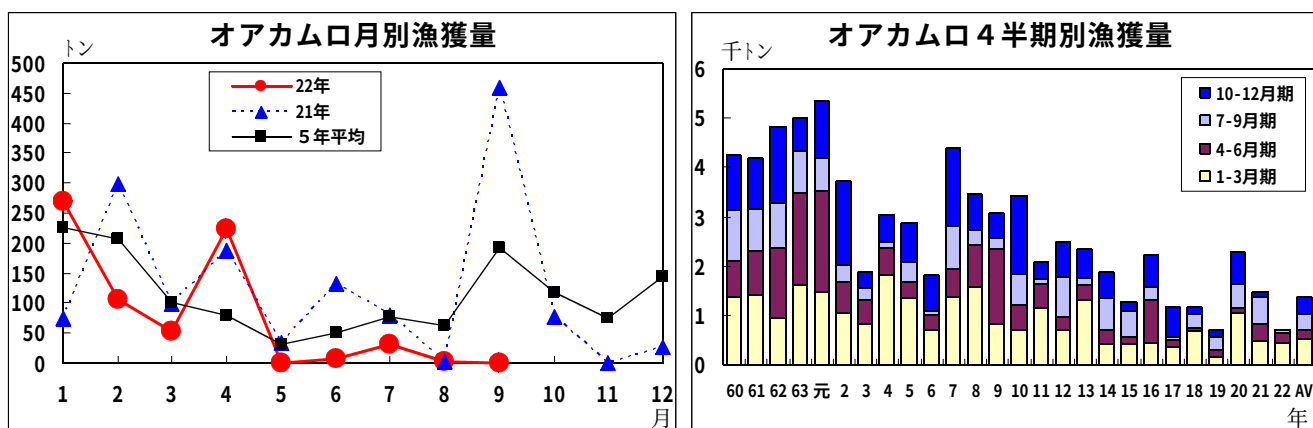


図 オアカムロまき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年（平成17～21年）の平均値(AV)、平成22年9月29日までの水揚量を使用。